

## 文学とオノマトペ

小松 英輔

自然の音を模倣して作られた単語を擬声語または擬音語（両方ともオノマトペ）という。また発話者の表情を真似た語を擬態語、心情をそのまま表現した語を擬情語、その他類似したものに詩人によく用いられる音象徴、また現実の模写という意味でなら表意文学でさえ擬態的であり、語のレベルに限らなければより大きなサンタクス（文）のレベルで発話者の表情を模倣したもの、更に現代ではオノマトペと無意識の関係までが論議されるようになった。議論を先に進める前に、あらかじめオノマトペと言われる現象を分類してその一覧表をかかげ、それに従って論を展開しようと思う。

### (一) 語のレベル

ワンワン、コチコチ（擬声語）

ピカピカ、キラキラ、ニコニコ（擬態語）

雨がしとしと降る。涙をはらはら流す (擬情語)

コロリンコ (態様をまねるといふよりリズムの模倣)

(二) 音象徴 フンボルト、ランボー、マラメル

(三) 表意文字 (文字そのものにおける擬態) クローデル

(四) 文 (サンタクスの) レベルで、行為者の何らかの姿態を模倣する。ラシーヌ

(五) 音素 (音韻) のレベルで、発話者の無意識的衝動が表現される。(Fonagy)

## (一) 語のレベル

ソシュールの『一般言語学講義』を読むとあまり長くはないがオノマトペについての記述が出てくる。彼が言うところによれば、意味するもの (signifiant) と意味されるもの (signifié) は一つの社会集団によって決定され、因襲化されたものであるから個人が勝手に変更することはできないが、この両者の結合は何ら自然的な紐帯を持たないという意味では、「意味するもの」と「意味されるもの」の結びつきは恣意的 (arbitraire) だといふのである。ところが、とソシュールは続ける、「オノマトペにはこの原則が当てはまらない。オノマトペとは定義によって、意味するものと意味されるもの、つまり音声と概念が自然的にしっかりと結びついているからである」(一九一一年五月二日の講義)

例えばフランス語では(1) 犬の鳴き声 (という概念) を犬の鳴き声から Oua-Oua と言う。(2) また幼児語と

して日本では犬のことをワンワンと言ひ、フランスでは *ou·ou* (擬声語) と言うが、存在そのものも擬音語で表わすことができる。従つて我々はこれらの単語を一般名詞のごとく使つて、*ou·ou amical* (歓迎の吠え声) とも *ou·ou agressif* (攻撃の吠え声) とも言えるし、*J'ai deux toutous* (二匹ワンワンを飼つてる) とも言えよう。同じような擬音語としてフランス語では時計の刻む音 (概念) は *tic tac*、鶏の鳴き声 (概念) は *cocorico*、水のはける音 (概念) は *glou·glou* と言ふ、これらは複数形で例えば *des tic·tac*、*des cocoricos*、派生語として *cocoriquer* (コケッココと鳴く) などと言ふことができる。

しかしここで注意すべきことは、これらはフランス語としてはやや不自然な音韻の連なりではあるが、出てくる音素としてはすべてフランス語特有の音素ばかりである。日本語でも時計はコチコチ、鶏はコケッココ、犬はワンワンと日本語特有の音素配列となつてゐる。つまり擬声 (音) 語というのは多かれ少なかれ自然音の模倣だが、それと同時にそれぞれのラング (国語) の中で半ば習慣化されているという意味で、非自然的な、つまり恣意的な結びつきであるとしシュールは考へてゐる。つまりひとたびラングの体系の中に組み入れられると、これらの語は歴史的な音韻変化、形態変化の対象になるということである。国語の体系の中に組み入れられて、長い間にそれがオノマトペであることが忘れられてしまつたものがある。フランス語の *pigeon* (ハト) がそれで、その語源はラテン語の *pipio* (ハト) から来た鳴き声をあらわす擬声語だったが、今日では誰もそのことを意識しない。

擬声語とは自然音の模倣だから聴覚的には万国共通であつてもさうようだが、*Grévisse*、*LE BON USAGE* によると各国人によつて *canard* (あひる) の鳴き声は次のように違つて聞える。

coin coin (フランス語)    rap rap (デンマーク語)    gack gack (ドイツ語)    mac mac (ルーマニア語)  
 qua qua (イタリア語)    kriak (ロシア語)    quack (英語)    mech mech (カタロニア語)

ここまで述べると、改めて目前の光景を直写するということがどういふことか考え直す必要があると思われる。聴覚から得られた知覚刺激はそれ程単純に、そして写實的に言語に定着させられるであろうか。例えば「涙をはらはら流す」と言った場合、目に映った光景は恐らく漠然としたものであろう。発話者が「はらはら」と言った瞬間に現実そのものの描写ではなくて、現実の再解釈が話者の心情に照らして行なわれたのであろう。これは信号機の赤・青・黄の知覚認識とよく似ている。目の網膜に映った色はそれ程コントラストをなした明確な色合いではなからう。大脳の、しかも言語野を通して、網膜に映った色の再解釈が行なわれ、あれ程明確な対立色に認識されるのである。

物に与えられた名前が自然のものか (Böök)、習慣によるものか (Böök)、最初の議論は恐らくプラトンの『クラテュロス』からであらう。自然を代表するクラテュロスと習慣を代表するヘルモゲネスの間に立ってソクラテスの立場はやや曖昧に見えるが、ソクラテスの意見で注目し価するのは「名前の現在の形は、原形から文字が除かれたり、加えられたり、その語の内部で転置されたりすることで、特に長い表現が短縮され、アクセントも変化することが多し」(399A, 414C, 415D, 416B, 421A, 399A, 416B)〔訳者による解説参照〕と述べていることで、変化の原因は様々だが要するにたとえその語が自然から生れたとしても何らかの理由でその語が変化するのは歴史的時間の中で一つの言語集団によりそれが習慣化されたからであって、それはソシユールの述べ

るラングの定義に等しいものである。

このプラトンの議論は十八世紀のフランスにおける言語起源論にたどりつく。「理性より感覚に訴える言語を」という標語は二人の感覚論者に受け継がれたのである。コンデイヤックは『人間認識起源論』で英国の経験主義者ロックの影響を受け、言語が人間の知覚に与える役割を考察した。コンデイヤックはこの中で人間の言語の発達過程を「身振り言語↓音声言語↓文字言語」が漸次的に進化したように秩序づけているが、彼の立場からすればむしろこの順序を逆にたどり、人間の記号活動のより本質的で隠された自然的な部分を明らかにすることであったと思われる。

コンデイヤックと同時代のジャン＝ジャック・ルソーもまた『言語起源論』の中でこれとよく似た議論を展開している。この本は元来音楽論の一部として執筆され、人間の表現行為の自然状態を考察したものである。ここでルソーの言うところを大まかに紹介するならば、人間の communications の段階を signe (記号) や身振りによるものと, parole (音声言語) によるものとに分けて考えてみる。ある意味内容を伝達するためには身振りや signe のほうが視覚的に訴える力が強くてよいが、しかし情念 (passions) を伝達するためには言葉の方が適している。なぜならば言葉は本来物質的な要求から起こるのではなく、情念から起こるものだからである。そして人は始めに推論する (つまり理性的に分析する) のではなくて感じるものであるから、人間の最初の言語は幾何学者の言語ではなくて、詩人の言葉であった。そして文明の発達にもなって詩人の言葉は消え失せたといつもの結論を下すのである。「訳者解説参照」次に引用する一節は自然を模倣した言語であるオノマトベがどのように理性的言語に変化発達するかを述べた点で注目される。「自然の声は音節がはっきりしない

のだから〔古代人などの使う〕単語には音節のはっきりした発音は殆どないだろう。それで幾つかの子音が母音の間にはさまって母音の重複をなくせば、それで音がなめらかになり発音しやすくなるだろう。……自然のものである声、音色、アクセント、リズムは、約束事であるはっきりと区切った発音(調音)に対して、ほとんど活躍の場をあたえず、人々は話すかわりに歌うようになるだろう。そして語源となる語は大部分、情念のアクセントとかまたは感覚で感じられた事物の結果とかを模倣した音(擬声音)であり、そこでは絶えずオノマトペが感じられるであろう(第四章) ルソーは、あたかも人間の言語が母音から発達し、エクリチュール(書かれた言葉)として言語を人間の意識から外在化するために子音を創造し、これが人間を支配する道具として使われたと言っているようだ。

一方日本にも、オノマトペと言語発生の関係を考察したこれとよく似た言語起原論がある。吉本隆明の『言語にとつて美とは何か』がそれで、その一節を私の言葉で要約するとおおよそ次のようになる。「……『海』という語の起原は、古代人が始めて海を見た時にその美しさに感動して思わず『うっ』とうなってしまった。水平線に遠く広がる水面はヨという大和言葉ですでに成立していたから、感嘆詞のヨと和語のヨとを組合せて『ヨヨ』となった……」(二三頁)感嘆詞も人間の動物的感情そのままの模写であるからオノマトペの一種に考えられ、その意味では「海」という語もオノマトペの一種だということになる。

しかしこの要約は吉本の考えを正しく反映したものではない。この前の段落で氏は次のように述べているからである。「言語は、動物的な段階では現実的な反射であり、その反射がしだいに意識のさわりを含むようになり、それが発達して自己表出として指示性をもつようになったとき、はじめて言語とよばれるべき条件を獲

得した」(二三頁) 誰も言語の起原について考察しうるような科学的手段を持たず、ただそのようなことがあつたかもしれないという空想だけがあるのだから、ソシュールは言語起原論は言語学の中に入らないとまで断言している。「一九一〇年十一月十五日の講義」吉本隆明のこの一節も、何事かを言わなければならない内的衝動と、その与件にうながされて言語共同体で自己表出する個人の現実的意識のことを述べたものに違いない。この論文は語の発生よりも、その語がどのように社会化され変形されていくか、また語を発生過程において捉えることにより、その原初の姿を回復しようとする、そのような意図をもった本だったと私は考える。

## (二) 音声象徴

ランボオの有名な詩『母音』は「Aは黒、Eは白、Iは赤、Uは緑、Oは青」(A noir, E blanc, I rouge, U vert, O bleu)で始まるが、Aと黒とを結びつける心理的な連想はあくまで遠く、それに対してフンボルトが『カヴィ語研究序説』(一八節)で説く音声象徴は直接対象を真似るのではないが、「他の音声との比較において、対象が心に与える印象に似た印象を耳に対して与えるような音声」である。例えばドイツ語の *stehen* (立つてゐる、ある) / *staug* (変らない、安定した) / *starr* (動かない) は、いずれも確呼としたものの印象を与える。また *Wehen* (風が吹く) / *Wind* (風) / *Wolke* (雲) / *wirren* (乱す) / *Wunsch* (願ふ) などの語は、揺れ動いて安定せず、我々の感覚の前で明瞭な形を取らずに右へ左へと乱れるような動きをWの音を用いて表現するという。これは前項(一)で述べた音声自身に潜んでいる類似的性格とは違っているが、ある概念が類推によって類似した

音声によって表現されるところから、この方法には「類推的表示法」という呼び名が与えられている。またこの方法は「名前は目前の対象の性格を正しく表わす」という前項の『クラテュロス』の議論ともよく似ているが、『カヴィ語研究』の中の同じ節にある次の言葉は、フンボルト自身の立場をより複雑に見せている。「言語を起源に遡って考えることは畏の仕掛けられた危険な道である。音においても意味においても、何が根源的であるかは早急には決し難し」

詩人マラルメルが考えたことはむしろ、音声と概念が詩人の感覚から見てへだたっていることに意味がある。マラルメルは詩論『詩の危機』の中で、「不透明な音色をもつ ombre (影) という言葉があるが、それに対して ténèbres (闇) という言葉は意味としてはなお一層の暗さを表わしているが、音色はむしろ明るい。更にまた jour (昼) という単語は意味に似合わず暗い音色を、また nuit (夜) は明るい音色を持っていて、何と気持ち裏切られることか」と述べている。マラルメの思想を一口に要約するならば、詩人の役割は「涙をはらはらと流す」というような signifiant (意味するもの) と signifié (意味されるもの) との直接的な結びつきを許すような母性的言語に甘えることなく、「言語にとって異質的な、総体的で新しい言葉を作り出すために言葉を焼き直し」(「ルネ・ギル」詩論)のための緒言)、いわば「父性的論理」に立って国語を見直すことだと述べている。

### (三) 西洋の表意文字

クローデルは人生の大半を外交官として生き、日本にも大使として着任したが中国滞在は十五年間に及び最も長かった。クローデルはこの体験の中から、表音語であるフランス語に含まれる表意的な要素を探究した。それらは次の四つの講演に収められている。

1. La philosophie du livre (1925) 本の哲学
2. Idéogrammes occidentaux (1926) 西洋の表意文字
3. Les mots ont âme (1946) 詩には魂がある
4. L'harmonie imitative (1933) 模倣の諧調

目の前に聞こえる音を模倣するのが擬声音、目の前に展開する運動を模倣するのが擬態語だとすれば、目の前に繰り広げられる情景を文字によって描写するのが表意文字であり、これも広い意味で擬態語の一つに考えられる。フランス語で *synesthésie* (共感覚) と言われるのは、ある音を聞いて色彩を想像するように、一つの感覚が他の領域の感覚を呼び覚すことを意味する。例えば英語の *see* のもつ視覚 (シニフィアン) は形態の類似により「目」という概念 (シニフィエ) を表わす (e は目を、y は鼻を表わす)。砂岡和子氏の報告によれば、*/aʊ/* という擬声語は「響きわたるさま」を一般的に表わすが、中国人はこれを六つの漢字に書き分けて区別する (浪・琅・琅・鋗・琅・朗)。これは視覚・聴覚・概念の連合をフルに活用したシネステジーである。

クローデルのあげた例で最も興味深いのは *locomotive* (機関車) であろう。先頭に煙突 (l) が立ち、輪 (o) が三つも並び、それぞれをピストンが結びつけている (e と m)、そして速度計 (t) の後ろには気笛 (i)

があり、その後ろには運転レバー (v) があって、一番後ろには連結器 (e) が付いている。アンダーラインは線路である。我がフランス語にも表意文字は幾つかあるというのである。

(四) サンタクスのレベルで

単語の一つ一つが目の前の音や光景を模倣するのではなくて、一行の文全体が何らかの姿を模倣していることがある。これもまた広い意味で擬態語ではないだろうか？

(1) Phèdre : N'allons point plus avant. / Demeurons, chère enfant.

Je ne me souiens plus : / ma force m'abandonne.

(v. 153-154)

(2) Aricie : Hippolyte demande / à me voir en ce lieu?

Hippolyte me cherche, / et veut me dire adieu?

(v. 367-368)

Racine の作品『フェードル』の一節。第一幕と第二幕でフェードルとアリシーが初めて舞台上に登場するこの場面は、ここにあげた四行の詩句の意味内容とは関係なく語り手の歩行的リズムに合せた台詞で、(1)の台詞は音楽でいう *lento* で語られ、エノーヌの腕に支えられ苦悩の波に身をゆだねるようによろめきながら一歩一歩前に進む様を一行の詩句の中に模倣している。(2)の台詞は、音楽で言う *allegro* で始まり活き活きした軽快な調子で恋人イポリットに会える喜びでほとんど小躍りしながら語られる。言葉の抑揚に与えるこの歩行的

リズムはまだ記号になる前の身体の運動をともなった生理的分節に近いもので、言葉のリズムが論理的構造となつて意味をもつ前にすでに言語表現に何らかの意味作用を与えている。リズムや呼吸で分節されたこれらの詩句もまた、広い意味で擬態語ではなからうか？

(五) Ivan Fonagy の無意識論

擬声語理論が今日フランスではどこまで進んでいるのであろうか？ 前に述べたフンボルトの「音声象徴」ほどの音韻が何を象徴するという素朴なものであった。そうではなくてフォナジーは、身体で無意識的に分節される音韻が語り手の隠された感情、つまり無意識を隠喩的に、或いは換喩的に表現するというのである。例えば /R/ apical (舌先を転がすように出す巻き舌の /R/ の音) は、これこれの音声的象徴だというのではなくて、この音を発する時の人間の「肉体的条件」は何かと問うているのである。彼の議論の最大特徴は、「意味するもの」と「意味されるもの」の関係が「恣意的」ではなくてむしろ無意識的に動機づけられているということである。オノマトペは目の前で繰り広げられる音声の模倣である。しかし単純にその音声を復原すれば語り手の分節努力が再現されるかといえば、そうではない。話者が現実の音そのまま表わすのではなく、語る主体がその音を象徴化し、記号化して、一定のサンタクスにそれをおさめる、つまり自我と対象の分離という観念の中にこそヨーロッパの言語の成立の起原があり、これは出産による母親からの分離と、父親の「法」の習得によって自我を確立するという個人史とある程度パラレルに考えることができる。

フランス語の /R/ の音は大別して舌先で硬口蓋をはじいて出す /R/ apical と、喉彦ごんげんを振わせて出す /R/ uvulaire とがある。舌先を転がして出す /R/ は巻き舌の /R/ とも言われ、今日ではバリ以外の田舎に残っているが、かつてはシャンソンや詩の朗読にかならず使われていた。ところがフォナジーによると、この巻き舌の /R/ の荒々しさは、その人間の権力とか男性的性格とかを表わす。しかし /R/ 音がこれこれの性格の音声象徴だというのではない。フォナジーによれば巻き舌の /R/ は一般的に最後に習得される音韻であり、これをもつて音韻レベルの言語習得は終る。これは四歳から六歳までの「性器段階」(思春期をひかえ、男女の性の違いを意識する時期)に表われ、母親の乳房などに対する部分的欲動の総合が行われる時期に一致する。この /R/ 音の獲得と子供の意識の発達は平行関係におかれ、子供のリビドー転移(性的欲動が他の領域に転移して表われること)を容易にする。つまり /R/ 音は単なる音声象徴ではなく、人間の性的欲動のメタフォール(置き換え)として表われるのである。

巻き舌の /R/ が音素として表われる言語においては、その音の獲得の早さ、遅さ、または非獲得(つまり /R/ 音への置き換え)は子供におけるエディプス期の解決の仕方いかんにかかわる」と彼は述べる。個人のレベルでエディプス期がうまく解決されなければ、青年期の性格形成がうまく行かず、同性愛や神経症に陥る青年が多いことも心理学的に言われているが、言語史の上でも R と L の混用は“lambdacisme”とか“Rhotacisme”とか呼ばれて、例えばラテン語の *pèregrinus* はフランス語の *pèlerin* となり、同じくラテン語の *fabulare* はフランス語の *trôler* になった。つまりエディプス期(六―七歳)というのは父親によって男根を引き抜かれるという幻想を抱く時期であり、それを乗り越えるために R 音を獲得するのである。この説明はフンボルトの象徴

理論より心理学的にはうがっているが、フロイトの理論を介在させたものであることは言うまでもない。

以上において私はヨーロッパにおけるオノマトペについての考え方の歴史を概説してきた。オノマトペは日本語に多く、西欧語に少ないと一般に言われて来たが、ヨーロッパでも特に詩人を中心にオノマトペに対する再評価の声は強く、最近でも

Charles Nodier 著

Dictionnaire raisonné

des ONOMATOPEES francaises (一八〇八年初版、一八二八年第二版)

が復刻出版され、この本には詩人の Henri Meschonnic が一〇四頁にわたる長い序文をつけている。

今手元にある一九世紀ラルース辞典で *onomatopée* の項を調べてみるとおよそ次のような記述が見られる。

十八世紀においてはとりわけ語源探究の意味でオノマトペに対する関心は高かった。しかし「オノマトペにあまり大きな役割を与えることは、この五十年來 Bopp, Humboldt, Grimm などによって打ち立てられてきたものをすべて打ちこわし、彼らの樹立した音韻法則をくつがえし、語源学を混同としたカオスの中に投げ込むことになるだろう。それに対して確実な法則に従ってすべての語を一定の語根に戻すことを認めさえすれば、これらの語根が音韻法則のタイプによるものか、オノマトペによるものかは大して重要なことではない」。一九世紀ラルース辞典は数百行にわたってオノマトペを記述しているが、二〇世紀ラルース辞典はわずか三十六行ですませている。これは辞典の規模がやや縮小されたこととは関係なく、ソシュールの『一般言語学講義』

におけるオノマトペの否定的な評価以来、風向きが変わったからであろう。

\* この論文は一九九〇年九月二日、本学言語共同研究所の例会において発表されたものである。なおこの年の共通テーマは『オノマトペ』だった。

### 参考文献

- Condillac (1746): *Essai sur l'origine des connaissances humaines*  
Claudel, Paul (1925-1946): *Oeuvres en prose (pletade)*  
Fónagy, Ivan (1970 et 1971): *Les bases pulsionnelles de la phonation (Revue Française de Psychanalyse)*  
(1983): *La vive voix (Payot)*  
Grévisse, Maurice (1975): *Le bon usage*  
Humboldt, Wilhelm von (1836): *Über die Kawi-sprache auf der Insel Java*  
『言語の精神』——カウゝ語研究序説(亀井健吉訳)  
Larousse du XIX<sup>e</sup> siècle (1866)  
Larousse du XX<sup>e</sup> siècle (1984)  
Mallarmé, Stéphane (1895): *Crise de vers (Pletade)*  
トランスメ全集(菅野昭正他訳)  
Platon (vers 383 av. J.-C.) *KPATYMOΣ*  
プラトーン全集(水地宗明訳)  
Racine, Jean (1677): *Phèdre*  
Rimbaud, Arthur (1871): *Voyelles*

Rousseau, Jean-Jacques (1763): *Essai sur l'origine des langues*

言語起原論 (小林善彦訳)

Saussure, F. de (1916): *Cours de linguistique générale* (publié par Bally et Séchéhaye)

砂岡和子 (1990) 『現代中国語のオノマトペ』(学習院大学言語共同研究所紀要 第13号)

吉本隆明 (1965) 『言語によって美とは何か』

(フランス文学科 助教授)